

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 9 日現在

機関番号：15301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22720186

研究課題名(和文) 沖縄県宜野湾市大山方言の文法記述および諸方言との比較研究

研究課題名(英文) A grammar of Oyama dialect in Okinawa Ginowan city and comparative study with the other dialects

研究代表者

又吉 里美 (Matayoshi, Satomi)

岡山大学・教育学研究科(研究院)・講師

研究者番号：60513364

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円、(間接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は大山方言の文法を記述することを目的とした大山方言の総合的研究である。主な成果は以下の3点である。(1)音韻体系および音韻変化の過程を考察し、大山方言における緩やかな口蓋化を指摘した。(2)はだか格を含めて16個の格形式を整理し、その機能を明らかにした。(3)動詞の形態について、動詞活用のタイプ、文末形式、連体形、テンス・アスペクトについて整理した。

研究成果の概要(英文)：This is a comprehensive study of Oyama dialect. The main purpose is that to describe the grammar of Oyama dialect. The following three points are the main results. (1) Considering the phonological system and phonological change, it was found that the phenomenon of soft palatalization is related to sounds [ki] and [gi]. (2) 16 case forms and the functions of these were cleared. (3) Considering the form of a verb, in particular paradigm of the verbs, end of a sentence form, adnominal form, tense and aspect, and the functions of these were organized.

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：日本語学

キーワード：国語学 方言学 文法記述 琉球方言 大山方言

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初の背景として、(1)琉球方言研究の基礎的研究から記述研究への流れ、(2)研究対象にされてきた方言の偏りの解消に向けて、以上の観点からまとめる。

(1)琉球方言研究の基礎的研究から記述研究への流れについて

琉球方言の研究においては、その音韻体系が共通語の音韻体系と大きく異なることや各集落の音声や音韻体系のバリエーションの多様さから伊波普猷のP音考に関する研究以降、音声・音韻研究が盛んであった。それは、言語研究、言語記述においては琉球方言の研究が初期段階であったことを意味するものともいえる。一方で、語彙を始め、文法、語法においても一定の研究がなされてきた。古くは平山輝男(1966)『琉球方言の総合的研究』をはじめ、中本正智氏の『図説琉球語辞典』における基礎語彙を中心として地理的分布をまとめた研究がある。また、昨今は語彙研究の集大成ともいべき辞書の刊行があいつぎ、生塩睦子(2009)『沖縄伊江島方言辞典』、前新透・波照間栄吉(2011)『竹富方言辞典』、富浜定吉(2013)『宮古伊良部方言辞典』が出版されている。文法研究では野原三義氏、内間直仁氏らによる助詞の研究などが見られる。2000年以前までの多くの文法研究は、動詞の活用をまとめたものや助詞の意味・用法の記述などいわゆる国文法をベースにするものが大半であったが、徐々にテンス、アスペクト、ムード、モダリティといった言語理論を取り入れた研究へと発展してきている。

共通語の差異の大きさから、琉球方言の研究は日本諸方言の研究の中でも盛んになされてきた研究分野である。そのようななか、ユネスコが危機言語としてアイヌ語の他に琉球方言圏の7つの地域のことばを奄美語、沖縄語、宮古語のように「言語」として扱い、2009年に危機言語として発表してからはさらに多くの調査や研究が活発になされるようになってきた。危機言語の研究の一つの方法として、文法記述があるが、琉球方言研究において現在盛んに取り組まれている。本研究はそのような研究動向の中であって、文法記述の方法に沿った研究である。

さて、研究開始当初の時点では、琉球方言の文法記述は下地理則氏の伊良部方言の文法記述が代表的研究であったが、現在では、琉球方言圏の諸方言の文法記述が進みつつある。本研究もそのような文法記述の研究へ貢献するものである。昨今では、研究コミュニティが充実し、多くの研究者から研究方法や理論についての意見を交換できる土壌が整いつつある。そのような状況において、記述項目や方法を合わせながら研究を進めてきており、本研究のねらいの一つである各方言間の比較研究への足がかりにもできようかと思われる。

(2)研究対象にされてきた方言の偏りの解

消に向けて

大山方言が属する沖縄中南部諸方言の研究において、特に本島では、那覇方言や首里方言の研究が盛んに行われているが、その他の諸方言についての研究はそれほど多くはない。つまり、地域的な偏りが見られるのである。沖縄本島中南部においても地域間の方言差が多く認められ、一カ所でも多くの方言の記述および研究がなされる必要がある。また、方言資料が多地域に渡って残されることは、言語研究の深化に貢献するものといえる。特に、大山方言は周辺地域との違いも少なからず指摘され、言語資料としても価値あるものといえる。

2. 研究の目的

本研究課題の目的は以下の3つである。

(1)大山方言の文法を中心とした記述。

大山方言は、沖縄中南部諸方言の中でも古い方言であると言われている。しかし、それは学術的に証明されておらず、大山方言の全体像は今もって明らかにされていないままである。本研究は大山方言を臨地調査し、構文論的な立場から文法記述を行うものである。特に、格形式と機能、動詞のパラダイムおよびテンス・アスペクト体系といった、言語の骨格を担う文法カテゴリーについて整理する。

(2)大山方言のテキスト資料の収集

大山方言が属する沖縄中南部諸方言の研究は那覇方言や首里方言を中心になされ、方言研究に偏りが見られる。沖縄中南部諸方言においてもその方言差は大きく、より多くの地域方言を記述し、研究する必要がある。そのため、言語資料の収集および作成が必要となる。特に、独話、会話といった様々な言語資料は言語研究の発展に必要なだけでなく、言語資料の保存という文化的価値という観点からも意義あるものである。

(3)諸方言との比較研究

大山方言の特徴、および琉球方言全体の特徴を見いだす目的としての比較研究をおこなう。特に文法的特徴は、比較研究をおこなうことによって、よりその特徴が明確になる。

3. 研究の方法

(1)臨地調査をおこなう。

当該地域出身者で80代以上の生え抜きの話者を中心に、自然会話による資料収集の調査をおこなう。会話の他、独話も調査対象とする。また、会話の調査内容として、話者の内的感情や興味に基づく話題や日常の出来事を語るものやイラストを利用した外部刺激による発話を促すものなどの工夫をこらす。できるだけ多くの語彙、文法事象、語法が会話中に出現するように配慮するためである。

文法の詳細を記述するため、調査票を利用した質問調査をおこなう。方言実態に即した文法記述を行うためには、自然会話の方言

資料が重要だが、動詞のパラダイムの整理やテンス・アスペクトなどの整理には、自然会話のみでは補えない部分がある。日本語研究やその他の方言研究で作成された調査票を利用したり、それらの調査票を適宜手を加えながら、文法記述に必要な資料を収集できるようにする。

(2) 会話方言資料の収集と整理

琉球方言は危機に瀕した言語と言われる。その一つである大山方言をはじめ、諸地域の方言を記録し、後世に残すことは人類にとっての文化遺産であるとも言える。そうした観点から、会話資料の収集および整理が必要である。得られた方言資料は eran や toolbox などのソフトを利用して文字化資料として整理する。

(3) 諸方言との比較研究

大山方言の特色をより明らかにするために、一地域の文法記述だけでなく、比較研究をおこなう。特に、研究代表者が長年携わってきた津堅島方言を中心とした比較研究のほか、他の研究者との研究交流を通して、比較研究をおこない、大山方言および諸方言の特色を明らかにする。

4. 研究成果

本研究課題の研究成果として以下の(1)音韻体系および音韻変化の過程、(2)格形式と機能、(3)動詞の形態についてまとめる。

(1) 音韻体系および音韻変化の過程

具体的に、音韻体系、音韻体系の特徴や留意点、音韻変化の過程について述べる。

音韻体系

大山方言の音韻体系およびその特徴について述べる。音素は以下のとおりである。

母音音素 /i, e, a, o, u/

半母音音素 /j, w/

子音音素 /h, ʔ, ʼ, k, g, t, d, n, c, s, z, r, p, b, m/

拍音素 /Q, N, R/

また、大山方言の拍構造は次のとおりである。なお、C は子音、S は半母音、V は母音を表す。

/CV/ /CSV/ /N/ /Q/ /R/

/CV/にはすべての子音と母音が立ちうる。

半母音は/j/は、/Cja/, /Cju/, /Cjo/である。/w/は/Cwa/, /Cwi/, /Cwe/である。

音韻体系の特徴や留意点

大山方言の音韻体系の特徴として喉頭音、音素 r と d の混同が挙げられる。

大山方言の喉頭音素には、/ʔ/, /h/, /ʼ/があり、以下のような対立が見られる。

/ʔwaR/ [ʔwa:] (豚)

/hwaR/ [ɸa:] (葉)

/ʼwa/ [wa:] (私)

/ʔ/は語頭で母音と結びつくときに出現する。/h/は、/u/, /w/の前では [ɸ]、/i/, /j/の前では [ç]、/a/, /e/, /o/の前で [h] となる相補分布をなす。

続いて、r と d の混同についてだが、大山

方言話者の中にはラ行音とダ行音の区別が話者自身はつきりと認識できない場合も見られる。一般的な調音音声学の観点から語頭および/N/のあとでは d で、それ以外では r で発音される傾向があるが、大山方言においては、その傾向が当てはまらない調音パターンもよく観察される。津堅方言でも同様の傾向が見られるが、津堅方言の方が語頭、/N/の後ではダ行音、それ以外ではラ行音の傾向がより明確である。

音韻変化の過程

現在の大山方言の音韻体系において、かつての音韻体系とは明確に異なる部分がある。それは、/kja/, /kju/の/ka/, /ku/への統合である。かつての大山方言の音韻体系では、/kja/, /kju/が存在していたが、それは大山方言の口蓋化の結果である。

ところで、大山方言には、琉球方言の特徴である口蓋化の現象が見られないものがある。特に、軟口蓋音の[k][g]は/i/の前後で、破擦音化して [tei] [ɸei] となる変化が、多くの沖縄中南部方言で見られるのとは異なり、[k][g]を保持している。

/kimu/ [kimu] (肝) /kin/ [kin] (着物) /kirasaN/ [kirasaN] (美しい) /ʔikimusi/ [ʔikimuei] (生き物) /ʔisigaki/ [ʔieigaki] (石垣) /mugi/ [mugi] (麦)

共通語の「キ」「ギ」に対応するように [ki] [gi] で現れる。大山方言では [ki] [gi] においては、口蓋化がそれほど進まなかったものと思われる。それは現在 [ka] [ku] に統合されたかつての [kja] [kju] の音声へたどることによって考察できる。

大山方言の [ka] [ku] の中には、大正時代まで、[kja] [kju] の音声で発音されていたものがあるとの教示を得た。これらは、戦前あたりから、[ka] [ku] と直音化する現象が生じたい。たとえば次のような語例が得られた。

ʔinjkjasaN → ʔinjkasaN (短い)

kju: kju.mi? → ku: ku.mi? (今日、来るか?)

大山方言でも多くの中南部方言に見られるように口蓋化が起こったものの、他の中南部方言に見られるような歯茎音(ʔinjteasaN 短い、teu: 今日 など)までいたらずその結果、破擦音化することなく、硬口蓋の部分における口蓋化にとどまったものと思われる。つまり、口蓋化といってもゆるやかな口蓋化であったといえる。そうして、一度、[ka] [ku] は口蓋化した [kja] [kju] になったが、戦前頃から [ka] [ku] という直音化が進んだものと考えられる。

大山方言は周辺地域との音声はやや異なることが従来から指摘されてきたが、その一つの原因は軟口蓋音 [k][g] における弱い口蓋化であったと言える。口蓋化の弱さゆえに、歯茎音までの口蓋化には至らず、硬口蓋までの口蓋化にとどまったことで [kja] [kju] の音声が生まれた。そして、イ段においては [ki] [gi] を保持することにつながった。

(2) 格形式と機能

大山方言の格形式として「ga、nu、Nka、naka、ni、Nzi、uti、uto:ti、sa:i、si、tu、kara、mari、juka」に（ゼロ はだか格）を加えた15の形式が確認できた。それぞれの機能については以下のとおりである。

- ga 主語を表示する 連体修飾の機能
- nu 連体修飾の機能 主語を表示する
（ゼロ） 動作の目標や対象を表示する 主語を表示する 連体修飾の機能
- Nkai 動作・行為の結果の状態を表示する 動作・行為の対象を表示する 移動先・移動の方向・移動の目的地を表示する 物の移動先・保管先を表示する 動作・行為の成立場所を表示する（移動することの意味を内包する） 人や物が存在する場所を表示する 受身の動作主を表示する 使役の動作主を表示する
- ni 動作・行為が行われた時間を表示する
- naka 人や物が存在する場所を表示する
- Nzi 動作・行為が行われる場所を表示する
- uti 動作・行為が行われる場所を表示する
- uto:ti 動作・行為が行われる場所を表示する
- sa:i 道具や手段を表示する
- si 道具や手段を表示する
- kara 時間における起点を表示する 空間における起点を表示する 移動行為・動作行為の行われる場所を表示する 移動手段を表示する
- mari 時間における終点を表示する 空間における終点を表示する
- tu 同じ所属・同類であることを表示する 比較の基準を表示する 動作・行為の成立に関わる対象を表示する 動作・行為の協同相手・対立相手を表示する 代替の対象を表示する
- juka 比較基準を表示する

同機能が複数の格形式に見られるものがある。たとえば、sa:i、si、kara には共通して「道具や手段を表示する」機能がある。sa:i と si には機能自体に差はないが、si よりも sa:i の方が表出しやすい傾向がある。

また、kara 格は移動手段を表示するが、手段を表示する機能を持つ sa:i と si も移動手段を表すことができる。これらの関係において、話者の以下のような内省が得られた。たとえば、 ϕ_{uni} =kara ikun は、自分では漕がずに、大型船などで行く場合が想定される。一方、 ϕ_{uni} =sa:i ikun、 ϕ_{uni} =ei ikun と ϕ_{uni} (船)が sa:i や si によって承接されると小型舟を自分で漕いで行く場合が想定される。また、車の場合も kara が後接すると、人の車で行くことが、sa:i、si の場合は自分で運転して行くことが想定されるとのことである。したがって、移動手段を表示する機能において、kara と sa:i・si とでは自分の力を使うかどうかで機能差があることが考えられる。

また、Nzi、uti、uto:ti の3つはいずれも「動作・行為が行われる場所を表示する」機能である。Nzi 格、uti 格、uto:ti 格の3つの関係において、動作・行為が行われる場所を表示する機能としては差はないようである。3つの形式の使用差を生む原因の一つは丁寧の度合い、親疎の度合いが考えられる。uti および uto:ti が使用されるのは、聞き手や動作行為の主体が親疎関係においてやや希薄な人物、敬意の対象となる人物であることが多い。一方、Nzi が使用されるのは、聞き手や動作行為の主体が親疎関係において密である人物や同輩・目下の人物であることが多い。すなわち、文法的な機能差というよりも、位相による使い分けの差異が考えられる。これらの格形式の使用差は構造的な文法記述だけでなく、社会言語学的観点からも文法記述をおこなう必要があることを示唆するものである。なお、このような差異は津堅方言ではあまり見られない。大山は首里にも近く、津堅島と比べれば、都市的である。また、大山にはかつては軽便鉄道が通っており、交通の要所でもあり、周辺地域との交流もあった。それに対して、津堅島は島ならではの閉鎖性がある。人間の移動や交流という観点から見ると対照的ともいえるほどである。特に敬語表現の発達には都市化が条件の一つになることがある。そうした社会状況が言語発達に影響していることが二つの方言を比較することでより明確になる。

(3) 動詞の形態

動詞の活用タイプ

動詞の活用タイプは大きく強変化タイプ、弱変化タイプ、不規則変化タイプの3つに分けられる。

強変化タイプ動詞 飛ぶ/飲む/見る/被る

基本語幹 (勧誘形)	連用語幹 (基本形)	音便語幹 (中止形)
tub-a	tub-uN	tu-ri
num-a	num-uN	nu-ri
Nd-a ~ Nz-a	Nzj-uN	N-ci
kaNr-a ~ kaNz-a	kaNzj-uN	kaN-ci

弱変化タイプ動詞 切る/やる/買う/洗う

基本語幹 (勧誘形)	連用語幹 (基本形)	音便語幹 (中止形)
ki-ra	ki-iN	ki-ci
uki-ra	uki-iN	uki-ti
koo-ra	koo-iN	koo-ti
ara-ra	ara-iN	ara-ti

弱変化タイプ動詞 来る/する

基本語幹 (勧誘形)	連用語幹 (基本形)	音便語幹 (中止形)
Kuura	ku-uN	kisi
sa	suN	sici

強変化タイプは、子音語幹で、基本形は-uNの形式をとる。ただし、Nzj-uN（見る）

kaNzj-uN (被る) のように子音語幹末に Nzj が来る場合、基本語幹と連用語幹の形式が異なる。基本語幹においては、Nd ~ Nz、kand ~ kanz のように zj が d ~ z に変化して表れる。弱変化タイプは、母音語幹で基本形は-iN の形式をとる。不規則変化タイプに kuuN (来る) suN (する) が含まれる。

動詞の主な文末形式

- ・断定形と否定形
 - 強変化 断定形 jum-uN、否定形 jum-aN
 - 弱変化 断定形 uki-iN、否定形 uki-raN
 - 来る 断定形 kuuN、否定形 kuuraN
 - する 断定形 suN、否定形 saN
- 否定形に形式として、強変化タイプは-aN、弱変化タイプは-raN となる。

・勧誘形と命令形

- 強変化 勧誘形 jum-a、命令形 jum-ee
- 弱変化 勧誘形 uki-ra、命令形 uki-ree
- 来る 勧誘形 kuura、命令形 kuu
- する 勧誘形 sa、命令形 see

勧誘形においては、強変化タイプは-a、弱変化タイプは-ra の屈折接辞をとる。命令形においては、強変化タイプは-ee、弱変化タイプは-ree の屈折接辞をとる。否定形とも合わせて見ると、弱変化タイプでは r の挿入があることがわかる。

連体形

連体形は語尾の-N を-nu に変化させることでその形式を作る。たとえば、jumuN は jumunu となる。また、-N を-ru に変える形式 (jumuru) も見られる。また、-ru 形式は du 結びの形式として jumuru のように表れる。

動詞のテンス・アスペクト

・完成相非過去と過去

過去形は弱変化タイプでは ukitaN (起きた) のように非過去 (基本形) の語末-iN を-taN に変化させることで過去形式が作られる。一方、強変化タイプ動詞では、語幹末が子音のため、音融合した形として-raN、-caN、-zjaN、-taN が表れる。

	非過去	過去
飛ぶ	tub-uN	tu-raN
飲む	num-uN	nu-raN
落とす	utus-uN	utu-caN
出す	nzjas-uN	nzja-caN
漕ぐ	kuug-uN	kuu-zjaN
寝る	ninzj-uN	nin-taN
被る	kanzj-uN	kan-taN

・継続相非過去と過去

継続相非過去は、完成相過去-taN を-tooN というように aN を ooN に変えることによって作られる。

	完成相過去	継続相非過去
起きる	uki-taN	uki-tooN

飛ぶ	tu-raN	tu-rooN
落とす	utu-caN	utu-cooN
漕ぐ	kuu-zjaN	kuu-zjooN
寝る	nin-taN	nin-tooN

継続相過去の形式は継続相非過去の語末 N を taN に変えることによって作られる。

継続相非過去 継続相過去

起きる	uki-tooN	uki-too-taN
飛ぶ	tu-rooN	tu-roo-taN
落とす	utu-cooN	utu-coo-taN
漕ぐ	kuu-zjooN	kuu-zjoo-taN
寝る	nin-tooN	nin-too-taN

・目撃性を伴う過去形

過去形式には直接体験、目撃性を表示する形式がある。ウチナーヤマトグチで「~よかった」と表現されるものである。

ahii=ja kii=kara
兄 = は 木 = から
uti-i-taN=ja

落ちる-目撃-過去 = 文末詞
(兄は木から落ちよかったよ。【目撃】)

tabako=gwa=ja narari
たばこ = 指小辞 = は 並んで
koo-i-taN=ro

買う-目撃-過去 = 文末詞
(たばこは並んで買いよかったよ。【体験】)

大山方言の動詞においては活用のタイプによって、屈折接辞の形式が異なることがまず指摘できる。さらに、子音語幹である強変化タイプの動詞は音融合によってバリエーションがあるので、音融合のタイプ別に整理する必要がある。また、アスペクト形式については、jumikakiiN (読みかけている) などの複合語の形式、caa jumisooN (ずっと読んでいる) 副詞を伴う形式などが得られている。それぞれの形式とアスペクト的意味機能との関係についても整理を進める必要がある。

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

又吉里美、下地賀代子、(続) 琉球方言における形容詞の比較研究—津堅島方言と多良間島方言—、南九州地域科学研究所所報、査読無、2011、第 27 号、pp.51-66

又吉里美、沖縄県宜野湾市大山方言の音韻とその変化過程の考察、志學館大学人間関係学部研究紀要、査読無、33 巻 1 号、2012、pp.71-85

又吉里美、沖縄県宜野湾市大山方言と津堅島方言の「に格」「へ格」相当格の比較研究、岡山大学国語研究、査読無、第 27 号、2013、pp.73(1)-84(12)

〔学会発表〕(計5件)

又吉里美、宜野湾市大山方言の文法記述、若手研究者育成セミナー消滅危機言語としての琉球語研究の意義と目的、2012年1月21日、琉球大学

又吉里美、沖縄県宜野湾市大山方言の特徴を探る - 琉球諸方言と対照させつつ - 、第26回岡山大学国語研究会、2012年11月10日、岡山大学

又吉里美、宜野湾市大山方言の文法記述 - 格の種類と機能 - 、第327回岡山国語談話会、2013年5月18日、就実大学

又吉里美、津堅方言の文法記述 - 動詞を中心に - 、沖縄言語研究センター定例研究発表会、2013年12月7日、琉球大学

又吉里美、大山方言の文法記述 - 動詞を中心に - 沖縄言語研究センター定例研究発表会、2014年6月14日、琉球大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

又吉 里美 (MATAYOHSHI SATOMI)

岡山大学・大学院教育学研究科・講師

研究者番号：60513364